日本科学者会議
福岡支部ニュース
No. 235
2015 年 12 月 15 日発行

●日本科学者会議事務局
〒113-0034　東京都文京区湯島 1-9-15
Tel: (03) 3812-1472

●福岡支部事務局
〒819-0395 福岡市西区元岡 744
九州大学・基幹教育院
小早川義尚　気付け
〈TEL〉092-802-6014
〈E-mail〉fukuoka@jsa-fukuoka.sakura.ne.jp
〈郵便振替〉福岡 01790-1-5576
〈支部 HP〉http://jsa-fukuoka.sakura.ne.jp/index.html

目次　　ページ

1　第 32 回九州沖縄シンポジウム（長崎 12/5-6）に参加して（報告）　1
2　学習講演会「玄海原発の再稼働の是非を問う」（11/14）の報告　3
3　第61回パグウォッシュ会議長崎大会（11/1-5）への参加報告　5
4　『日本の科学者』読書会（10/12）「11月号特集：隣国ロシアにどう向き合うべきか」の報告　6
5　例会等の案内　8
5-1　『日本の科学者』１月号 読書会（2016年1月11日）「１月号特集：平和学の現在−アジア太平洋平和秩序への道筋」
5-2　福岡核問題研究会（2016年1月16日）「原発と地震・火山」
5-3　『日本の科学者』２月号 読書会（2016年2月8日）「２月号特集：貧困問題と社会福祉の役割」
5-4　福岡核問題研究会（2016年2月20日）「原発再稼働とテロ対策（仮題）」

１．第 32 回九州沖縄シンポジウム（長崎 12/5-6）に参加して（報告）

「日本科学者会議第 32 回九州沖縄シンポジウム」（2015 年 12/5-6 長崎大学経済学部）に参加した。初日午後は、「九州沖縄からつくろう！平和で持続可能な社会」を主テーマに 5 本の報告と討議、続いて 2 日目午前には、大学の困難な状況についての情報交換が行われた。

報告 1 は亀山統一氏（沖縄）による「自衛隊南西シフト、日米同盟深化のなかの沖縄・九州」であった。亀山氏はまず、戦争法制の強行成立で確実に若者の「戦死」の可能性が出てきたことを指摘し、自衛隊変容の一事例として、先の 8 月に発生した沖縄島沿岸での米軍ヘリ墜落事故を挙げた。「研修」と称してヘリに同乗していた自衛隊の即応部隊員が負傷したのだ。米軍演習場で

は陸上自衛隊と海兵隊との共同訓練が常態化している。氏は「10.21 沖縄県民大会」の 1995 年から今日までを、自衛隊が米軍との一体化を劇的に進めた 20 年とみて、沖縄と岩国、佐世保、佐賀等との結びつきにも注意しながら、「日米同盟」強化の動きを分析した。辺野古新基地建設反対の声が「オール沖縄」の運動に高まっていることの本質について、報告者は、沖縄戦と戦後の苦しみを決して次世代に味わわせないことと基地依存からの脱却を目指す、沖縄の人々の決意である、とも指摘した。最後に安倍政権が進める自衛隊「南西シフト」、「離島防衛」などの軍備強化策の危険性を訴えた中で、彼らが振り撒く「中国脅威論」を我々の側から払拭することが決定的に重要だ、と念を押した。

報告 2 は森永徹氏（福岡）が「玄海原発と白血病」と題して、玄海原発が立地する玄海町とその周辺で白血病による死亡率が増加していることの原因究明に、統計手法で迫ろうとする研究の結果を発表した。全国の原発の中で玄海のそれが一番多量のトリチウムを放出しているが、トリチウムはβ崩壊を伴う放射性元素であることから、その内部被曝が白血病の一原因として疑われるのである。報告者はまず、全国的傾向である高齢化に伴う白血病死亡率増加の傾向や、成人 T 細胞白血病(ATL)の影響を差し引いても、原発稼働後の玄海町の白血病による死亡率は原発から遠い地に比して高いことを示した。続いてトリチウムが生物濃縮されることを示す海外での測定データや、トリチウムがマウスの白血病を誘発する傾向を示す動物実験結果も引用された。森永氏は、玄海町における白血病死亡率の上昇には玄海原発から放出されるトリチウムの関与が強く示唆される、と結論づけた。

報告 3 は吉田省三氏（長崎）による「『レベル 4 施設』の住宅地立地と住民の人権」と題する報告で、エボラ出血熱流行の機会に乗った長崎大学の感染症研究拠点施設設置計画の問題についてである。（予稿の題目は「「国際的な感染症の脅威の高まり」と病原体実験施設の立地規制の緩和」となっている。）この計画は、長崎大学医学部構内という住宅密集地隣接地に高度に危険な病原体実験施設を建設させようとするもので、「今がチャンス」、「国際貢献になる」と、長崎大学と長崎市が連携して推進しているが、周辺住民の反対に遭っているのである。吉田氏は、(1)「実験施設はできる限り患者、住民、公衆のいる地域から離れて立地させる」(WHO 勧告 1997)との国際基準に準拠すること、(2) 頑なな産学官共同推進のやり方が、市民の安全を確保するための自主的調査・検討を難しくしていること、(3)バイオセキュリティの観点から、施設は国の直接管理下に置かれることが必定で、地域の自治と民主主義に異質なかかる施設は長崎市の都市計画に障害となること、をこの計画への反対の重要な根拠とした。更に氏の検証は、学術会議が「提言」を出す、BSL-4 施設として既に設置されたが実験停止継続中であった武蔵村山市の施設が今回のエボラ流行を契機に稼働させられ、長崎大学も機に乗じて予算請求をする、長崎市と連携する、「有識者会議」に「論点整理」を出させる、等々の経緯にも及んだ。

報告 4 は市川英孝氏（鹿児島）が「マイクロ水力発電とコミュニティビジネスの可能性」と題して、鹿児島大学の地域経営研究センターが主体となった社会実験の評価・考察を行った。農業用水路等を利用できる鹿児島県内 3 サイトにマイクロ水力発電機を設置して、先ずそれらの発電性能を確かめている。しかしそこで市川氏は、この実験の目的は、売電ビジネスにあるのではなく、飽くまで、「マイクロ」エネルギー源を地域リソースとして見直し、それを地域の永続的発展に利用できるか、にあると念を押して、「コミュニティビジネス」の立場から次の 4 つの視点による検討を、霧島市溝辺町での実験結果に加えた。このサイトでは、小型電気自動車を購入し、地域の物産館と組んでその自動車で宅配サービスを行い、電気自動車の充電にマイクロ水力発電を利用する。(1)新たな市場の創造の視点(これには新たな宅配サービスの開発が当たる)、(2)マルチステークホルダー型組織運営の視点、(3)顧客との新たな関係の視点(これには買い物弱者である高齢者との日常的交流が当たる)、(4)資金面での自立の視点。最後の視点では課題が残るが、報告者は、本社会実験によるトータルでの「価値創造」はこれまでのコミュニティビジネスの範疇を超える画期的事例である、と結論付けた。

報告 5 は長沼信之氏（長崎）による講演「長崎のしま(島)にみる地域社会のあり方」で、この数年「しま」の研究を深めてきた長崎県立大の教員と学生による五島列島・新上五島町の調査結果

であった。長沼氏はまず「しま」研究の持つ意味について、①高齢化や人間関係が疎遠になって行く 10 年後、20 年後の地域社会を見ること、②お金中心ではない新しいパラダイム転換の手がかりをつかむこと、③貴重な環境やユニークな文化歴史を維持する地域から人間的時間・人間的感性の復活を展望すること、④大都市だけ残って他はどうなっても知らん、と言わんばかりの歴史を歩んで良いのかと、鋭く問うことにある、と訴えた。長崎県の所謂「限界集落」の 4 割近くが五島列島に集中している。調査はその中の新上五島町（全 123 集落）で行われた。地道な町内会による人々のつながりと集落の活性化、キリスト教の信仰を中心にした横のつながり、地域包括支援センターの取り組み、I ターン者の役割とその定住化、小学校の廃校の影響、年金生活の実態、家族離れ離れの状況、交通問題や生活物資供給のサービス、自給自足的農業・漁業の維持など、多岐に亘る項目で住民や各種機関・団体と対話した結果のまとめが披露された。長沼氏は、政府の「離島」政策及びそれを頼みに補助金をせびることに生き残りをかけるかのような県の姿勢を批判した上で、五島での調査結果を力に、「自分の力で生きて行く方向を探らなければならない」と締めくくった。

初日の最後に 5 本の報告に関する総合討論があったが、なかでも目立ったのは市民活動家や自治体問題に携わる方からの質疑や要望であった。色々と異なる分野の研究や活動に接することが出来たのは本シンポが長崎県地域･自治体研究所の後援を得て行われたお蔭でもあろう。福岡県からの参加者 3 名とも所謂「理系」なのに対し、福岡以外から参加の研究者の専門分野は、経済、経営、歴史学、地理学、法律、農学などと多様であった。会議冒頭の挨拶で地区担当常幹田島氏や本部の牧氏が科学者会議の魅力として挙げたキーワード「学際性と社会性」は本物だと実感させられた。

2 日目、短い時間ではあったが、大学問題の情報交換の場が設けられた。鹿児島大からは、「安全保障関連法案に反対する鹿児島県大学人有志の声明」への賛同を広げる活動、防衛省研究公募に鹿児島大からも応募者が出たことに関連して、軍学共同について問題提起、があった。長崎大からは、初日の報告 3 に関連する大学の動きや学部教授会への本部の監視の体制などが話された。筆者は福岡県の 3 国立大に関するいくつかの情報を伝えた。大学が「３つのカテゴリ」のどれか一つに割り当てられ、「ミッション」なるものも決められ、それに基づいて本部主導で「改革」が打ち出される。教員はそれをこなすことで「評価」ポイントを挙げなければならなくなっている。いまこそ「大学とは何か」の原点に戻ることが必要、との声も出された。最後に、大学問題や軍事研究の問題に関して、日本科学者会議の九州沖縄地区として声明を出そうということになった。来年度の九州沖縄シンポジウム(第 33 回)を成功させようと確認し合って散会した。

シンポジウムからの帰途に長崎歴史文化博物館に寄った。江戸時代の人々が長崎という窓から欧州の文化に接せんとする有様が今の我々の共鳴を呼ぶ。明治初年、海底通信ケーブルが長崎-上海間と長崎-ウラジオストク間に敷設され、初めて日本と大陸が直接電気的につながった。そのケーブルもそこで見える。それにしても、昔も今も人は学を求めて長崎に来るのである。

（報告者：西垣　敏）

２．学習講演会「玄海原発の再稼働の是非を問う」（11/14）の報告

九州電力は玄海原発 3, 4 号機を 2016 年の夏には再稼働するよう準備を急いでいる．玄海原発で重大事故が起これば場合によっては重大な被害を受けることになる福岡市において，下記の学習講演会「玄海原発の再稼働の是非を問う」を福岡核問題研究会の主催で開いた．

日時：11 月 14 日（土）18:00～20:30
場所：福岡市立中央市民センター　第一会議室

内容：講演

①岡本良治氏（九工大名誉教授）「世界最高水準の原子力規制基準ってほんと？」（20 分）
②中西正之氏（元燃焼炉設計技術者）「水蒸気爆発及び水素爆発の危険性」（20 分）
③豊島耕一氏（佐賀大名誉教授）「佐賀県議会における奈良林参考人陳述への批判」（20 分）
④森永　徹氏（元純真短期大学講師）「玄海原発と白血病」（20 分）
質問と討論（60 分）

夜にも拘わらず 35 名の参加があった．岡本氏は，「日本の原子力規制基準は起因事象の設定だけは厳しいが，その設定に対する評価が極端に甘く，世界一楽観的な進展シナリオに沿った，世界一奇妙な評価が行われている」と厳しい評価を下した．

中西氏は，西欧やソ連／ロシアにおける過酷事故対策の基本は水蒸気爆発や水素爆発を回避するため水を使わない対策であり，溶融した核燃料を格納容器に貯めた水で冷却するという規制委員会推薦の対策は，危険であるとした．

豊島氏は，佐賀県議会・特別委員会での奈良林直氏による放射線の人体への影響を軽視するなどの発言に対して批判を行った．

最後に，森永氏は，佐賀県内の 20 自治体について玄海原発稼働前および稼働後の白血病死亡率と玄海原発から自治体までの距離の関連を調べ，玄海原発からの距離が小さい自治体ほど稼働後の白血病死亡率が高くなっていることを示した．様々な要因を検討した結果として，この白血病死亡率の増加は玄海原発から放出されるトリチウム以外には考えられないと結論した．

休憩後，森永氏の講演に関連した質疑・討論を中心に，これらのデータをどのように再稼働に反対する運動に生かしていくかという議論も含めて活発な討論があった．

「さよなら原発！佐賀連絡会」から，佐賀市において 12 月 12 日に同様な原発問題学習会を開催したいという提案があり，協力することになった．

学習講演会について参加者に尋ねたアンケートの結果は以下の通りであった．

（1）あなたの性別を答えてください．
a. 女性：27%　　b. 男性：73%

（2）あなたの年代を選んでください．
a. 20 代：0%　b. 30 代：9%　c. 40 代：0%　d. 50 代；18%　e. 60 代：55%　f. 70 代以上：18%

（3）このシンポジウムを何で知りましたか．
a. 友人・親族：27%　b. ウェブサイト：9%　d. メール：55%　e. その他：9%

（4）この学習講演会の感想を次から選んでください．
a. 大変有用であった：55%　b. まあまあであった：18%　無回答：18%　　難しかった：9%

（5）日本科学者会議の原発シンポジウムや講演会に出席されたことがありますか．
a. 参加したことがある：55%　　b. 今回が初めて：45%

（6）今後，講演会などで取り上げてほしいテーマは何ですか（複数選択可）．
a. 放射線被ばくの健康被害：55%　　b. 福島第一原発の現状：45%
c. 原子力発電への地震の影響：27%　　d. 引き続き，玄海原発の再稼働問題：45%
e. 原子力発電の廃炉問題：55%　　f. 再生可能エネルギーの展望：45%
g. 日本の原発輸出政策について：36%　　h. 安保法制に関する問題：27%

（7）その他，ご自由にお書きください．
・重要な話を有難う御座いました
・九電，国との交渉内容とレベルが違いすぎる．学習会，研究会をたくさん行ってたくさんの人に知ってもらう以外に方法はないのかも知れません．
・原子力，核分裂等について素人なので専門的な話はなかなか理解が困難ですが，安倍晋三や菅義偉がいう「世界最高水準の安全性」がデタラメであることだけは理解できる．政府の原発政策を止めさせるような運動の理論武装となるような話を聞きたい．
・今回初参加です．ぜひ，次回も参加させていただきたい．
・自分には難しすぎてほとんどわからなかった．いただいた資料や研究会の HP をみて，少しでも理解できるようになりたい．科学者の先生たちが主催してくれた学習会なので，「科学」

の話は「科学」の話として，また，「科学以外の部分」の話，たとえば，「政治とか行政」の話はそういうもんですよと分けて話してもらえて，そこはよくわかった（でも実際は，その理屈をそのまま押し通すことはできません）．

（報告者：三好永作）

３． 第 61 回パグウォッシュ会議長崎大会への参加報告

岡本良治（九工大名誉教授）

表記の国際会議が 11 月 1 日-5 日まで長崎温泉やすらぎ伊王島ホテルと長崎大学などにおいて開催された．支部幹事より筆者に支部通信への報告依頼があったので，個人的な角度から以下報告する．

１．全体についての情報

限られた字数であるので, パグウォッシュ会議についての関連ホームページ情報を文末に記す. 日本からの参加者約 30 名を含み，全体で約 200 人の科学者，NGO 関係者または政府関係者が出席した．参加者の中には下村　脩氏（ボストン大学名誉教授，ノーベル化学賞受賞者），益川敏英氏（京都大学名誉教授、名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構長，ノーベル物理学賞受賞者）も含まれていた．念のため，益川氏は JSA 会員でもあることを記す．８月 1 日に山口市で開催された原水禁科学者集会におけるパグウォッシュ会議長崎大会へのアピール(英文)も参加者への配布資料の 1 つに含まれていた．会議は多くの時間帯が全体会議(1，3 日は長崎大学などにおける公開セッション）で，残りはホテルで非公開の分科会に分かれての討論会であった．会議は基本的に英語で行われ，長崎市の端にある会場ホテルから長崎大学に移動する場合には，午前 7 時半ホテルロビー集合，夜 8 時にホテル帰着ということもあるほどタイトなスケジュールであった．

２．参加することになった経緯

８月上旬に, パグウォッシュ会議長崎大会組織委員会副委員長の栗田禎子氏(千葉大学教授)から, 日本からの参加者候補リストへの掲載の可否を問い会わせるメールが送信されてきた．多分，選ばれることはないだろう軽めに考え，日程的には参加可能であったので，リストへの掲載を承諾すると回答した． 9 月上旬に，ローマにあるパグウォッシュ会議本部から公式の招待状がメールに添付されて送られてきたので，想定外で驚いた．この直後にわかったのであるが，日本からの参加者候補リストへの掲載の際に私を推薦した人があり，御本人からその由の連絡があった．

３．参加しての印象

会場ホテルで，沢田昭二氏(名大名誉教授)，矢ヶ崎克馬氏(琉球大名誉教授)，板東昌子氏(愛知大名誉教授，元物理学会会長)らにあった．会議の幹部にはかなり年配の人もいたが，ハードスケジュールにも拘わらず，多くの人は活力に溢れているように見えた．

パグウォッシュ会議長崎大会では，例えば，中国の元将軍や米露の軍縮関係高官などが出席しているなど，私の想定とは少し違う会議内容に最初とまどい，自分の(英語による討論力に）非力さを感じた．私は旧知の参加者の松田正久氏（愛知教育大の前学長）と馴れない単語が多く含まれる英語の討論などで疲れるものだとホテル居室で毎日嘆息していたが．しかし，高橋博子氏(広島市立大平和研究所前講師)，Frank von Hippel 氏（プリンストン大教授）など参加者数名と知り合いになれたことは想定以上の成果であると思う．その中に，フランス人の若手研究者がいて，ホテル移動中にたまたま話しかけたところ，同業の実験家で，かつ核兵器技術のことで少し資料をもっていることがわかり，後日その資料を送ってってもらった．

私が参加したのは第８分科会（ハイテクと科学者の社会的責任）で，その座長 2 人は日本とアルゼンチンの女性研究者であった．日本人司会者も海外での勤務経験が長いようで，早口の英語にも頭の回転の速さにも驚いた．

2010 年の日本物理学会誌に「科学者の社会的責任の現代的課題」という藤垣裕子氏(東大総合文

化研究科教授)の論文が掲載されていたので，大会直前に再読し，コメントのメールを送っていたが，同氏も同じ分科会にいたので，会場内外で数回意見交換した．しかし，藤垣氏の 2010 年論文の内容では，脱原発運動など現実の科学者の社会的運動の行動原理＝参照規準としては不十分であると思うに至った．元学術会議会長の吉川弘之氏とも分科会で一緒で，私からもいろいろはなしかけた．例えば，彼の本「テクノロジーの行方」によれば，テクノロジーの本質はデザイン(設計）にあることである，それならば，beyond-design-basis accident としての原発の過酷事故をどう考えるべきでしょうか，と尋ねたら，「うーん」とうなったきりであった．

先述の矢ヶ崎氏は当初は別の分科会に参加していたが，その中には原発推進派が多くて嫌気がさしたと言って，最終日に私の分科会に移ってきた．そして，約 10 分間の時間をもらって，放射線被ばく評価について ICRP 批判を行うトークをしたが，英語表現の不十分さもあり，ほとんど質疑はなく，矢ヶ崎氏は当惑していたので，隣席に居て，気の毒に思った．

最終日，イランの核開発をめぐる 12 年にわたる欧米との交渉をイラン副大統領兼原子力庁長官が英語で講演し，質疑応答も丁寧に行っていたことも印象的であった．漫画本を読むのが好きだと言明した副総理のいる国の国民の一人として恥ずかしくなった．

４．今後に向けて

原発問題だけではなく，核兵器問題，ハイテクの軍事民事両用問題など幅広い運動を発展させる必要と，国際的な場面でも基本的な議論ができるように，英語による表現力・運用力を大きく改善する必要がある．科学者の社会的責任論の現代的課題についても，市民からの問いかけが必ずしもなくても，科学的または技術的な真偽について疑念がある，または誤りの可能性があることについて，独立した立場からの異議申し立て（「糺す」）を，できるだけ信頼性が高く，精度も高い水準で目指すべきと思う．

引用文献・情報

１）日本パグウォッシュ会議長崎大会ホームページ
http://pugwashjapan.wix.com/pugwash-nagasaki2015
２）ラッセルアインシュタイン宣言 URL
http://www005.upp.so-net.ne.jp/russell/RUSSELL-EINSTEIN.HTM

４．『日本の科学者』読書会（11/9）の報告

◆11 月号読書会　「＜特集＞隣国ロシアにどう向き合うべきか」

以下は 11 月 9 日（月）の読書会において報告されたレジュメをもとに『日本の科学者』読書会の様子を編集したものです．

堀江則雄 著「ウクライナ危機をどう見るか ― プーチン戦略を踏まえて」

ウクライナ危機を生み出した要因には，ウクライナ「国民」が形成されていない（国民の一体化・統合が出来ていない）ことがあると著者はいう．ウクライナは歴史的に東西に分離しており，東部は 17 世紀から帝政ロシアの一部であり，西部はポーランドの一部であった．言語・宗教も，東部はロシア語・ウクライナ正教，西部はウクライナ語・当方カトリック教と異なっている．ウクライナは独立以来，大統領・権力者による汚職や新興財閥（オルガリヒ）の政権癒着などを背景として異常な経済破綻に陥ったという．ウクライナ危機の底流には，米国とロシアの戦略的思惑の対立がある．NATO や EU の東方拡大が一方であり，プーチンは「ユーラシア経済連合」を打ち出している．プーチン戦略は，ロシア・中国・インドのユーラシア大国の結束を軸に，従来の国際政治経済秩序の転換を図る路線を明確にしつつあるという．ウクライナの「クライー」は「端」を意味する．ウクライナは EU の「端」でもロシアの「端」でもなく，双方の「架け橋」になる地政学的位置にある．ウクライナが危機を脱して発展する展望は，ここにしかないと著者

は強調する．（報告：T.M.）

黒岩幸子 著「「北方領土」問題の現状と展望」

日本は，中国・台湾・韓国・北朝鮮・ロシアのすべての隣国と領土問題（尖閣列島，竹島，北方領土）を抱えているが，北方領土問題は①依拠すべき多数の公文書が存在し，②人が暮らしており，③両国が交渉の意思を持っている点で特徴がある．この問題に関連する条約は，日魯通商条約（1855 年），樺太千島交換条約（1875 年），ポーツマス条約（1905 年）およびサンフランシスコ条約（1952 年）である．サンフランシスコ条約 2 条 c 項で放棄した「千島列島に国後・択捉（＝南千島）は含まれない」との主張で歯舞・色丹・国後・択捉の 4 島を「北方領土」と呼ぶようになった．1956 年の日ソ共同宣言では，平和条約締結後に歯舞・色丹の引き渡しを明記している．そして，2001 年のイルクーツク声明でこの共同宣言は基本的文書であることが確認されている．しかし，2002 年，鈴木宗男議員の逮捕により，外務省の対ロ外交チームも解体されて以降，日ロ交渉が停滞している．著者は「２島プラスα」案を提案して，国後・択捉の帰属については期限付き協議を求めている．（南千島の返還あるいは全千島の返還を目指すかいずれにしろ，サンフランシスコ条約 2 条 c 項の廃棄は必要ではないか？）（報告：E.M.）

蓮見　雄 著「ＥＵ・ロシアのエネルギー関係の変化と日本への示唆」

これまでは，エネルギー市場は売り手市場であると暗黙の前提があったが，自由化と再生可能エネルギー（再エネ）の発展によって，エネルギー市場は急速に買い手市場に変化しつつある．EU とロシアのエネルギー関係は，この変化を示す実例である．本論文では，EU・ロシア関係を素材として日本が対ロシア関係で取るべき外交姿勢を考察している．EU は，供給源・エネルギーミックスの多様化（再エネの開発など）やエネルギー網の相互接続による消費国協力を進める中で化石燃料のロシア依存を軽減してきた．たとえば，世界のガス輸入の 9.5%を占めるドイツは他の EU 諸国と協力することで大口の買い手として振る舞うことが出来ている．世界のガス輸入の 11.5%を占める日本は，再エネの開発などエネルギー市場の自由化とともに，韓国や台湾と協力することで EU 諸国に匹敵する大口の買い手としてロシアと交渉することが必要だと強調している．（報告：T.Y.）

安木新一郎 著「日ロ経済関係の新局面」

プーチン政権下で経済成長してきたロシアは，2013 年から国際原油価格の低迷，ルーブル為替相場の急落，ウクライナ危機に端を発した対ロ経済制裁などにより，GDP 成長率は鈍化してきている．ロシアは，日本の北に広がるロシア 200 解離水域でのサケ・マス漁の 2015 年の割当量を前年比 7 割減にしたり，2016 年 1 月からロシア水域でのサケ・マス流し網漁を禁止したり，パイプラインによる天然ガス輸出計画をアムールヒョウ保護を名目に中止したりしている．これらは自然環境保護を名目にした対ロシア経済制裁への報復であるという．他方では，プーチンはロシア極東に経済特区「先進経済発展地域」などを設置して日本企業にロシア極東への投資を呼びかけている．本来，経済面では潜在的に互恵関係にある日ロは協力しているべきであると著者はいう．（報告：Y.M.）

河村　豊 著「＜特別企画＞軍事研究を拡大させる「軍学共同」の新たな動きー最近 15 年間の動向から考える」

軍学共同に関する新たな３つの動きを告発している．１つは，2014 年 8 月に防衛省が公表した「安全保障技術研究推進制度」である．防衛装備品の能力を飛躍的に向上させるため，大学や独立行政法人の研究機関や企業等における独創的な研究を発掘し，将来有望な芽だし研究を育成する制度とされている．２つめは，米国の国防高等研究計画局（DARPA）を参考にして総合科学技術会議が提案した「革新的研究開発推進プロジェクト（ImPACT）」である．2013 年度の補正予算では，このプログラムには 5 年間で 550 億円が計上されており，防衛省を含めた省庁横断が特徴である．最後は，「新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）」を使い，軍事目的に応用できる技術を企業の中から発掘，資金面で支援し，技術革新を促そうという動きである．表向

きは「軍事研究」の表現が使われることはないが，「両用技術」という表現で実質的には軍事技術の研究に門戸が開かれようとしている．最後に著者は，軍事研究の最終的成果は破壊技術の生産であり，日本が進むべき道は非軍事の科学技術政策を提示することだと結論している．（報告：S.K.）

（報告者：三好永作）

５．例会等の案内

5-1　『日本の科学者』１月号 読書会

日　時：2016 年 1 月 11 日（月）14:00～17:00
場　所：ふくふくプラザ 604 室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
内　容：『日本の科学者』１月号＜特集＞「平和学の現在−アジア太平洋平和秩序への道筋」

5-2　福岡核問題研究会

日　時：2016 年 1 月 16 日（土）14:00～16:30
場　所：九州大学筑紫キャンパス総合研究棟 C-CUBE５階 511
講　演：「原発と地震・火山」
講演者：山崎文人氏（元名古屋大学地震火山研究センター）

5-3　『日本の科学者』２月号 読書会

日　時：2016 年 2 月 8 日（月）14:00～17:00
場　所：ふくふくプラザ 604 室（福岡市中央区荒戸 3-3-39）
内　容：『日本の科学者』２月号＜特集＞「貧困問題と社会福祉の役割」

5-4　福岡核問題研究会

日　時：2016 年 2 月 20 日（土）14:00～16:30
場　所：九州大学筑紫キャンパス総合研究棟 C-CUBE５階 511
講　演：「原発再稼働とテロ対策（仮題）」
講演者：森田満希子氏（九州大学大学院）